

## アラン・ラムジーの牧歌

海老澤 豊

十八世紀初頭の牧歌論争では、ポープの古典的牧歌とフィリップスの英国風牧歌の優劣が問われた。ポープの『牧歌集』には古典牧歌の影響が色濃く感じられ、羊飼いたちの名前は大半がウェルギリウスの牧歌からの借り物である。第一牧歌には黄金時代の片鱗が残っているが、作品が進むにつれて牧歌世界も凋落の一途を辿る。これに対してフィリップスの『牧歌集』はスペンサー風の古語や方言を多用し、描かれる風景や動植物は英国のものばかりである。羊飼いたちも英国の田園に住む、いささか卑しさと色好みが目立つ者たちで、英国の風習や迷信が頻繁に取り上げられている。

ゲイはフィリップスの英国風牧歌を茶化す目的で『羊飼いの一週間』を書いた。一段と卑俗さを増した羊飼いたちは、古典牧歌に頻出するモチーフをひねり、フィリップス風の俗語や方言を話し、いかにも馬鹿げた行動に明け暮れる。三篇のなかで最も諧謔味の強い牧歌だが、生き生きとした描写は抜きん出ている。

どこにも存在しない方言を用いたゲイの土着的な牧歌は、多くの詩人にとって牧歌における新鮮な試みと映ったようで、スコットランドやイングランド北部で暮らしていた詩人たちは、それぞれの故郷で実際に使われていた方言によって牧歌を書いた。そもそも地方語で牧歌を書くことは、ドーリア方言を用いたテオクリトスの『牧歌』にまで遡る。彼らはテオクリトスという模範を掲げて、地方色豊かな田園風景を舞台に、方言で話す羊飼いたちを描いた。本稿では「地方的牧歌」を読み解く試みとして、スコッツ語で書かれたアラン・ラムジーの牧歌を取り上げ、その特色を探る。

### (1) ラムジーとジョン・ゲイ

スコットランド南部ラナークシャーに生まれたアラン・ラムジー (Allan Ramsay,

1684-1758)は、鬻職人を経て書店を経営するかたわらで、スコッツ語を用いた詩を書き始め、ロンドンの文壇でも知られるようになった。彼の最もよく知られた作品は、五幕からなる牧歌劇『高貴な羊飼』(*The Gentle Shepherd*, 1725)であるが、本稿ではその前身となった牧歌数篇を論じる。

ラムジーは『詩集』(*Poems*, 1721)の序文で、「死んだ言語」(古典語)で書かれた作品しか取り上げない銜学者たちは母国語の美しさを知らないと批判し、死語や外国語をほとんど知らないことは少しも自分の不利益にならないと豪語する。その一方でスコッツ語は、敏感すぎる者には耳障りに響くかもしれないが、「新たな生命と美」を詩歌に与え、最良の批評家たちに称賛されるテオクリトスのドーリア方言に劣らぬ効果を及ぼすと述べている。また自分は自然を模倣したのであって、すでに誰かが言ったことを繰り返しているわけではないと、ラムジーは自作が独創性も備えていることを協調する。(1)

さらにラムジーはスコットランドの古詩を集めたアンソロジー『常緑, 1600年以前に独創的な詩人によって書かれたスコットランド詩集』(*The Ever Green, being a Collection of Scots Poems, Wrote by the Ingenious before 1600*, 1724)の序文で、最近の詩歌の「気取った優美さと作為のある洗練」に飽き飽きしている読者は、我々の祖先が実践していた「思考の自然な強靱さと文体の簡素さ」をこれと喜んで交換するだろうと記している。スコットランドの古詩は我々の祖国で生み出されたものであり、異国からくすねたり略奪して移植したものではない。これらの詩に描かれたイメージや風景はスコットランド固有のものに他ならず、我々が日頃目にしている野原や草地を写したものであるとラムジーは言う。彼の意図は次の文章に端的に表われている。

詩人たちの描写の中で、朝日はスコットランドの水平線に昇る。読者は木蔭や小川や微風のために、ギリシアやイタリアに運ばれることはない。森は我々の谷間に聳え、川は我々の泉から流れ出し、風は我々の丘から吹いてくる。(2)

このようにラムジーはスコットランドの言語を用いてスコットランドの自然を描いた古詩を大いに称揚する。彼はこの他にもスコットランドの民謡を採集した『茶卓拾遺, すなわち完全なるスコッツ・ソング集』(*The Tea-Table Miscellany: Or, a Complete Collection of Scots Sangs*, 1723-37)や『スコットランドことわざ集』(*A Collection of Scots Proverbs*, 1737)などを編纂している。

ただしラムジーは詩作においては、言語をスコッツ語に限定することなく、英語（イングランド語）も普通に用いている。『詩集』（1721）には全部で80篇の詩が収められており、巻末の目次では作品がジャンルごとに分類されている。その内訳を見ると「真面目な詩」が14篇、「喜劇的な詩」が11篇、「諷刺的な詩」が6篇、「牧歌」が3編、「抒情的な詩」が27編、「書簡体の詩」が12篇、「警句風の詩」が7編となっている。ラムジーがさまざまなジャンルの詩を試みていることが分かるが、用いられた言語は英語とスコッツ語がおよそ半々ほどである。詩集の巻末にはスコッツ語の小辞典がつけられており、ラムジーがイングランドの読者も念頭に置いていたことが分かる。

同様にラムジーはイングランドの文壇に背を向けているわけでもない。彼が中心となってエジンバラで設立した文芸サークル「イージー・クラブ」は、アディソンとスティールが編集主幹を務める『スペクテイター』を模範としていた。また『詩集』（1721）の予約購読者リストには、アーバスノット、アーロン・ヒル、ポーブ、スティール、サヴェイジといったロンドンの文人たちが名を連ね、『詩集』第2巻（1728）の同リストにもアーバスノット、ポーブ、スティールの名前が確認できる。

(3)

とりわけラムジーが敬愛していた詩人はジョン・ゲイであった。パストラル・エレジーとして書かれた「ケイトとスーザン、郷土ジョン・ゲイの思い出に寄せる牧歌」（“Kate and Susan, A Pastoral to the Memory of John Gay, Esqr,” 1732）の中で、ラムジーはゲイに加えてプライア、アディソン、スティールを「不滅の四人」（these immortal four, l. 9）と呼んでいる。(4)

ゲイに対するラムジーの敬愛は『羊飼いの一週間』の著者ジョン・ゲイ氏に宛てた書簡詩、クイーンズベリー公爵夫人が彼の詩を褒めたことを聞いて（“Epistle to Mr. John Gay, Author of the Shepherd’s Week, on hearing her Grace Duchess of Queensbury commend some of his Poems,” 1728）にも如実に表われている。ラムジーは『羊飼いの一週間』の登場人物「ブラウザリンドやボウジビー」（Blowzalind and Bowzybee, l. 2）に触れながら、自らは「千里眼を持つ詩人」（A Bard that has the second Sight, l. 11）として、ゲイの名声が永続することを予言する。ラムジーはロンドンを訪れることを望みつつも、エジンバラ郊外にあるペントランド山地でこう歌う。(5)

そこで歌うのだ、ヒナゲシ、エニシダ、木々を、

澄んだ小川や、西風を、  
鳴く羊の群れや、忙しい蜜蜂を、  
快活な農夫たちを、  
裾をたくし上げた乳搾り娘と喚いて踊るのだ、  
苔むした野原で。

There sing the Gowans, Broom and Trees,  
The Crystal Burn and Westlin Breez,  
The bleeting Flocks, and bisy Bees,  
And blythsome Swains,  
Wha rant and dance, with kiltit Dees,  
O'er Mossy Plains. (ll. 97-102)

これはラムジーが、ゲイの詩風に倣った地方的な（そしていささか卑猥な）牧歌を書こうという意志を明確に表わした詩行である。またここで使われている詩形が 4a4a4a2b4a2b というスコットランドの伝統的な「ハビー・スタンザ」(Habbie Stanza)であることも、その傍証となろう。なお1729年にゲイはクイーンズベリ公爵夫妻にしたがってエジンバラを訪れ、ラムジーとの初対面を果たした。(6) その際にゲイはラムジーに『高貴な羊飼い』のスコッツ語表現を説明してくれるように頼み、同作品の熱烈な称賛者であるポーブと文通したらどうかと勧めたという。(7)

ただし方言を用い、地方色豊かな、農民生活に密着した牧歌という共通点を別にすれば、ゲイとラムジーの牧歌には顕著な相違点も認められる。レノルズが指摘するように、(8) ゲイがフィリップスの牧歌をあげつらうために『羊飼いの一週間』を面白おかしく書いたのに対して、ラムゼイは最初から最後まで真面目な態度を崩すことがない。ラムゼイの牧歌には羊飼いたちの愚かとも思える言動が垣間見えるが、それは土着的な人々のありのままの暮らしを描こうとした結果なのである。

## (2) ラムジーのパストラル・エレジー

ラムジーがスコッツ語で書いたパストラル・エレジーを二篇取り上げる。「リッチーとサンディ、郷土ジョウゼフ・アディソンの死に際しての牧歌」(“Richy and Sandy, A Pastoral on the Death of Joseph Addison, Esq.”)は1719年に単独で出版

された。(9) これにはジョサイア・バーチェットによる英訳が脚注のように付されているが、正確な逐語訳というわけではない。バーチェットは44年間も海軍大臣の職にあったが、ラムジーに献詩を送るなど文人肌の人物でもあった。ここで登場するリッチーはリチャード・スティール、サンディはアレクサンダー・ポープのそれぞれ牧歌的ペルソナであり、アディソンも同様にエディと呼ばれる。

作品は「なぜそんなに悲しい顔をしているのか、サンディ、教えてくれ」(What gars thee look sae dowf, dear Sandy, say?, l. 1) というリッチーの質問で唐突に始まる。続けてリッチーは笛を持って陽気な曲を奏でてくれと頼むが、サンディは嘆くままにさせてくれとにべもない。リッチーが彼女に振られたのか、亡霊に脅えたのか、それとも牝羊が足を挫いたのかと悲嘆の理由を執拗に問うと、結局サンディは「とても甘美に歌い、奏でたエディが死んだのだ」(Edie, that play'd and sang sae sweet, is dead, l. 14)と打ち明ける。

この冒頭のやり取りは古典牧歌を模したものであり、サンディが悲しむ理由としてリッチーが推測する、失恋と家畜の怪我も伝統的な牧歌にしばしば見られるモチーフである。また「古い壁の中から光を放つ亡霊がお前を脅かしたのか」(has some Bogle-bo / Glowrin frae 'mang auld Waws gi'en ye a Fleg?, ll. 8-9)という件も、素朴な羊飼いの信じる民間伝承や迷信として時に牧歌で取り上げられるモチーフであるが、古典牧歌よりもフィリップスやゲイの英国風牧歌に接近したものと考えられる。

作品の中盤でサンディとリッチーは在りし日のエディを偲ぶ。サンディはエディの作品を列挙して彼の功績を讃えるが、たとえば次の引用はアディソンの「ハリファックス卿チャールズ閣下に宛てたイタリアからの書簡詩」(“Letter from Italy, to the Right Hon. Charles the Lord Halifax, in the Year MDCCF”)への言及である。(10)

彼は葡萄やテンニンカの育つ所で、ラティウムを  
くねって流れる波について何と甘美に歌ったか。  
マンチュアの羊飼いやティテュルスは遥か昔に  
葦笛で恋する男の苦しみを巧みに歌った。  
彼がこの我々の時代で目の前にいたら、  
腹蔵なくエディと月桂樹を分かちたであろう。

How sweet he sung where Vines and Myrtles grow,  
 Of wimpling Waters which in *Latium* flow.  
*Titiry* the *Mantuan* Herd wha lang sinsyne  
 Best sung on aeten Reed the Lover's Pine,  
 Had he been to the fore now in our Days,  
 Wi' *Eddie* he had frankly dealt his Bays. (ll. 27-32)

「ティテュルス」はウェルギリウスの第一牧歌に登場する詩人の牧歌的ペルソナで、「恋する男の苦しみ」は第二牧歌「アレクシス」を指す。アディソンの書簡詩は牧歌ではないが、彼の詩人としての才能はウェルギリウスにも匹敵するということであろう。さらにサンディは「頭を垂れよ、丘よ、泣くがいい、泉よ、お前たちの縁でもはや羊飼いは歌わないのだから」(Hing down ye'r Heads ye Hills, greet out ye'r Springs, / Upon ye'r Edge na mair the Shepherd sings, ll. 43-4)と歌う。これは感情を持たない自然がエディの死によって悲しみにくれるという、古典牧歌に頻出する「感傷的誤謬」の一例である。

サンディが詩人としてのエディを讃える一方で、リッチーはエディの人となりについて歌う。自分が苦しんだり悩んだりした時に、エディは優しく笑って僧侶のように幸福について語り、自分を快活にしてくれた。エディはあらゆることに長けていて、月光によって潮の干満を知り、髪の毛を見るだけで翌日の天気を予測できた。またエディはミルトンの『失樂園』の素晴らしさを自分に教えてくれた。ステイールとアディソンは盟友とも言える間柄であったから、リッチーがエディの人物像を語るのは自然なことである。

最後にサンディはエディが神に召されて天に昇ったのだから、やがて空の上で我々も彼と再会することができるだろうと語る。死を悲しみ、遺徳を列挙し、最後に慰めを得るのは、古典的なパストラル・エレジーの基本構造であり、ラムジーはこの作品でそのパターンを遵守している。さらに「トマスが牡牛を鋤から解放した。マギーはこれまでに夕食のスコーンを焼いた」(*Thomas has loos'd his Ousen frae the Pleugh; / Maggy by this has beuk the Supper-Scones*, ll. 70-1)という夕暮れを告げて、歌の終わりを宣言する締めくくりもまた古典牧歌の模倣である。

『詩集』(1721)に収録された「キーサ、ウィグタウン伯爵夫人メアリーの死を悼む牧歌」(“*Keitha: A Pastoral, Lamenting the Death of the Right Honourable Mary Countess of Wigtoun*”)もスコッツ語で書かれたパストラル・エレジーであり、

リンガンとコリンが交互に歌う。(11) 二人はキーサ (キースの女性形) を失った悲しみ、彼女の美しさ、夫との仲睦まじさ、遺された幼い娘への同情、飢えた羊飼いたちに施しを惜しまなかった彼女の善行を次々と歌っていく。

最後にリンガンは「最初に亡くなった者は最初に永遠の喜びを得る」(Syne wha dies first, first gains eternal Joy, l. 98) と言って、コリンに悲しみを忘れよと促す。ここでも「リッチーとサンディ」と同様に、悲しみ、称賛、慰めというパターンが認められる。またパストラル・エレジーでしばしば見られるリフレイン「嘆くが美しい、美しいキーサはもういないのだから」(Lament, for lovely *Keitha* is nae mair) が四回繰り返された後に、「もはや我らと共にいないが、レディは幸福なのだから」(Our Lady's happy, tho us nae mair, l. 100) と変化したところで、二人は歌を止める。

この項ではラムジーのパストラル・エレジーを二篇取り上げた。見た目にはスコッツ語で書かれているが、エレジーの伝統的な構造を備えているばかりか、古典牧歌から借用したモチーフも確認できる。ことさらにスコットランドの自然や風物が詠み込まれているわけでもない。ラムジーのスコットランド風牧歌は、次項で取り上げる作品において結実したと見るべきであろう。

### (3) ラムジーのスコッツ牧歌

続いて『高貴な羊飼い』の原型となった二篇の牧歌を取り上げる。「パティとロジャー、海軍大臣ジョサイア・バーチェット殿に捧げる牧歌」(“Patie and Roger: A Pastoral inscrib'd to Josiah Burchet Esq; Secretary of the Admiralty,” 1720) は、九連のハビー・スタンザで書かれたバーチェット宛ての献詩の後に、ヒロイック・カプレットで書かれた本文が続くという構成になっている。(12)

この作品はスコッツ語で書かれ、スコットランドの自然の中でスコットランドの羊飼いが歌い交わすという設定になっているが、古典牧歌からの借用がかなり見られるので、その点を中心にして読み解いていく。冒頭は陽光を避ける木蔭、新鮮な泉水、花の咲き乱れる野原など、古典牧歌の「心地よい場所」(Locus Amoenus) を思わせる描写で始まる。

岩山の南斜面に生えた木蔭の下、  
澄んだ泉が癒しの水を湧かせるところで、

二人の若い羊飼いがヒナゲシの上に横になり、  
五月の陽気な朝に羊たちを見守っていた。  
哀れなロジャーは嘆いて空ろな木霊を響かせ、  
一方の陽気なパティは歌を口ずさんでいた。

Beneath the South-side of a Craigy Bield,  
Where a clear Spring did healsome Water yield,  
Twa youthfou Shepherds on the Gowans lay,  
Tenting their Flocks ae bonny Morn of *May*:  
Poor *Roger* gran'd till hollow Echoes rang,  
While merry *Patie* humm'd himsel a Sang: (ll. 1-6)

脚注には「哀れなロジャー」は財産こそ豊かだが気鬱に取りつかれており、一方で財産は持たないが「陽気なパティ」(パトリックの短縮形)が彼を慰めようとする  
と記されている。パティがはなやかな季節にそぐわない悩みの原因を尋ねると、ロ  
ジャーは嵐が逆巻く川を波立たせることも、カラスやキツネが仔羊の血を求めるこ  
ともないが、終わることのない悲しみに圧迫されているのだと曖昧に答える。

これに対してパティは自分の晴れやかな心境を語る。これは古典牧歌に頻出する、  
ありえないことを大げさに歌うときの常套表現である「さかさまの世界」  
(Adynaton)を模したものである。

蜜蜂は花を嫌って、巣を離れるであろう、  
柳は沼地で繁殖することを止めるであろう、  
軽蔑に満ちた娘たちや、世俗的な富の損失が  
私の安らぎをかき乱し、涙を流させるとしたら。

The Bees shall loath the Flower and quite the Hive,  
The Saughs on boggy Ground shall cease to thrive,  
E'er scornfou Queans, or Loss of warldly Gear,  
Shall spill my Rest, or ever force a Tear. (ll. 21-4)

ロジャーはパティが柔らかい声と滑らかな舌を持ち、老人と若者の双方に気に入



られているが、自分が歌ったり話したりすると、皆は耳をふさいで乳桶を持ち去り、緑地や羊の囲いから罵倒するのだとパティを羨む。それでもロジャーは「だが俺は背が高く、お前のように格好もいい、娘の目にふさわしくないこともない。お前の持つあらゆる羊の十倍を数える」(Yet I am tall, and as well shap'd as thee, / Normair unlikely to a Lasse's Eye: / For ilka Sheep ye have I'll number ten, ll. 33-5)と自分にも長所がないわけではないと自慢する。このように自分の外見や風采、財産持ちであることを自慢する件は、テオクリトスの第十一歌「キュクロプス」やウェルギリウスの第二牧歌「アレクシス」に源を発する牧歌の古典的なモチーフである。

二人はこのように取りとめのない会話を交わしていくが、ロジャーの悩みの原因が明かされるのは作品の三分の一を過ぎたあたりで、恋するジェニーが振り向いてくれないということであった。パティがお前には希望がすっかりなくなったのだから、向こうの崖から飛び降りてしまえと、故意にロジャーを挑発すると、ロジャーも急いで血を流す必要はないと語る。失恋のために崖から投身自殺するというモチーフも、テオクリトスの第三歌「アマリュリス」やウェルギリウスの第八牧歌に見られる。続いてパティは自分がメグの心を勝ち得た手管を語り、ロジャーにジェニーを見捨てるふりをすれば、彼女はすぐに気持ちを変えるし、別の女を口説けば、彼女は気違いのようになるだろうと策を授ける。

心の晴れたロジャーは自分を慰めてくれた礼に、母親の手になる色とりどりのタータン織(まだ背中に羽織ったこともない)をパティに贈る。その見返りとしてパティは、六頭の太った仔羊を売った金で購入した「葡萄の木で作られ、象牙の輪をはめた、すてきな音の出る見事な笛」(Of Plumb-tree made, with Iv'ry Virles round, / A dainty Whistle wi' a pleasant Sound, ll. 56-7)を差し出すが、ロジャーはその笛はパティにこそふさわしいと辞退する。このような贈り物の交換は、古典牧歌の歌合戦で引き分けに終わった際(勝敗のつくほうが珍しいのだが)に為される儀式であり、牧歌世界に平和が保たれていることの象徴である。

最後にパティは丘に登って羊たちがちゃんと草を食んでいるかを見ようと提案し、「焼いたケーキとチーズのひとつを地主も喜ぶ朝食にする頃合いだ」(Be that Time Bannocks and a Shave of Cheese / Will make a Breakfast that a Laird might please, ll. 163-4)と言う。古典牧歌では羊を囲いに入れる時間だ、あるいは夕食の準備ができた時分だと言って歌の交換を締めくくることが多いが、ラムジーはこれを朝方に置き換えて模倣しているのである。

ここまで古典牧歌からの借用について見てきたが、この詩にはスコットランド風の要素も十分に盛り込まれている。たとえばロジャーがこぼす「俺の牛小屋は倒れ、九頭のきれいな牛が窒息した、妖精の矢が三本、だが俺はこれら災難に耐えた」(My Byar tumbled, Nine brow Nowt were smoor'd, / Three Elf-shot were, yet I these Ills endur'd, ll. 41-2)という件がある。脚注によれば、これは妖精によって放たれる矢によって、牛たちが何ら外傷のないままに急死するが、傍らには小さな三角形の平たい石が見つかるという。他にも貝殻を身にまとって音を立てながら現われる「水精」(shellycoat, l. 78)のような民間伝承や、スコットランド民謡「沼地の向こう」(O'er Bogie, l. 92)などが端々に織り込まれている。

「ジェニーとメギー、パティとロジャーと対になる牧歌」(“Jenny and Meggy. A Pastoral, being a Sequel to Patie and Roger,” 1723)では、ハビーの窪地にある小さな滝に洗濯にやってきた二人の娘が遠慮のない会話を交わす。(13) ジェニーはロジャーに心惹かれているが、彼が愛の告白をしないために苛立っている。一方のメギー(マーガレットの短縮形)はパティとの結婚を夢見ている。かくして幸福な結婚生活を否定するジェニーと、これを肯定するメギーの間で論争が始まる。

結婚した男は妻のために自由を失ったと思ひ込み、ある日は押し黙り、次の日には怒鳴り散らし、酒に酔って妻に鞭をふるうのだとジェニーが言えば、メギーはパティの優れた感覚は愛を長いこと保持すると抗弁する。続いてジェニーは子供を得た生活の難儀さを悲観的に訴える。

花嫁になるのは楽しいことだね、  
 あんたの炉端ではむずかる子供たちが  
 あれこれ欲しがって喚き、厄介な音を立て、  
 ぼろを着せるために、あんたは耕し紡がねばならぬ。  
 子供は病気になり、スープで火傷し、  
 向こうずねを折り、靴を失くすのさ。

O 'tis a pleasant Thing to be a Bride,  
 And whindging Gets about your Ingle-side,  
 Yelping for this or that, with fashous Din,  
 To mak them Brats, then ye maun toil and spin.  
 Ae Wean faws sick, ane scads himsell wi' Broo,

Ane breaks his Shin, anither tines his Shoe: (ll. 93-8)

これに対してメギーは同じ状況での幸福感を夢想して言う。

そう、妻になるのは心が躍ること、  
炉端には幼い子供たちがたくさんいて、  
私が幸福なら、喜びを得るだろう、  
子らの他愛ない不満を聞き、きちんとさせる。  
ジェニー、膝もとで喧嘩する小さな子供たちを  
見るより大きな喜びがあるかしら、

Yes 'tis a heartsome Thing to be a Wife,  
When round the Ingle-edge young Sprouts are rife;  
Gin I'm sae happy I shall have Delight  
To hear their little Complaints, and keep them right.  
Say, Jenny, Can there greater Pleasure be,  
Than see sic wee Tots toolying at your Knee, (ll. 103-8)

このように二人の会話は正反対の立場から結婚生活の是非をめぐって続いていくが、隣り合って生えている二本の楡が年を経るにしたがって枝を伸ばし、今では互いに絡み合っているというメギーの例え話に、ジェニーは自分の負けを認めて、秘かにロジャーとの結婚に憧れていることを告白する。古典牧歌からの借用は影を潜め、スコットランドの平民の娘たちが交わす会話は、かなり土着的な色彩を強めている。ラムジーはこれら二篇の牧歌を発展させて、五幕物の牧歌劇『高貴な羊飼い』へと結実させることになるが、単独の作品としてもそれなりに楽しめよう。

#### (4) ラムジーのスコッツ語

スコットランド古詩の収集に努めたラムジーが、地域性を強調するためにスコッツ語を採用したのも自然なことであったと思われる。イングランド中部出身のシェンストンは1761年の書簡で『高貴な羊飼い』を評して、長詩でありながら「感情と言語の簡素さ」が実に巧みに保たれており、スコッツ語小辞典の助けを借りなければ

ばならなかったことを告白しながらも、「古いスコッツ語が称賛すべきドーリア方言を形成している」とテオクリトスの牧歌になぞらえて激賞している。(14)

ところが同郷の文人たちはラムジーのスコッツ語に批判的である。詩人ビーティは「詩歌と音楽について」(1776)で、ウェルギリウスの牧歌こそ完璧であるという立場から、ラムジーはテオクリトスのような「野卑」に陥っていると非難する。なぜならスコッツ語は改善された状態であっても十分に田舎風であるのに、『高貴なる羊飼い』は最も無学な人々の間でしか聞かれない語法によって品位を落としているからだ。(15) ビーティは「笑いについて」でも、スコットランドの平民と話したことのないイングランド人にとって、『高貴なる羊飼い』の言語は古めかしく、曖昧で、理解できない。一方、この言語を完全に理解できるスコットランド人には「語法の卑しさ」と感情の品位や真面目らしさの対照によって馬鹿げたものに思われると記している。(16)

ヒュー・ブレアも『修辞学と文学に関する講義』(1783)で、『高貴な羊飼い』がスコットランドの古い田舎風の方言で書かれているために、じきに廃れてしまい、理解されなくなるだろうと述べ、さらに全体的にスコットランドの田舎の風習を描いているために、地元の人間以外にはさっぱり理解できず、鑑賞できまいと断じる。(17) さらにジョン・ピンカートンは『古代スコットランドの詩歌』(1786)で、ラムジーを「道化」呼ばわりし、彼はミッド・ロジアンの下層民が話すスコッツ語しか知らないために、「飛び切り粗野な語法」を使わざるをえず、下品なユーモアへの嗜好とあいまってより馬鹿げたものになっていると罵倒する。(18)

しかしながら、このような批判こそ、ラムジーの作品が地方的特性を備えている証左であり、廃れた古めかしい言語を牧歌に導入することは、テオクリトスやスペンサーの伝統に則しているとも言える。批評家たちはテオクリトスやスペンサーを論じる際に、必ず言語の古めかしさを非難してきたという歴史もある。

ウッドハウズリーは『ラムジー詩集』(1800)で、スコットランドの批評家たちは、地方の方言で書かれたものはすべて「粗雑で粗野」だと見なしてしまうと苦言を呈した後に、『高貴な羊飼い』の言語は確かに現代のスコッツ語とは異なるが、話し手の性格に完全に合致しており、「ドーリア風の簡素さ」を備えていると評価する。またウッドハウズリーは、登場人物がもっと洗練された現代的な方言を話したとしたら、それは真実と自然に著しく違背するものだとも述べている。(19)

スコッツ語を用いたラムジーの影響は、やがてロバート・ファーガソンを経て、ロバート・バーンズにまで及んでいく。逆に言えば、バーンズが有名になりすぎた

ために、ラムジীর存在はかき消されてしまいがちだが、彼が地方的牧歌を前面に押し出して方言を採用したことは、イングランドの詩人たちにも模範となったのである。

## 注

本稿で用いたテキストは *The Works of Allan Ramsay*, eds. vols 1-2 by Burns Martin & John W. Oliver, vols 3-6 by Alexander M. Kinghorn & Alexander Law, 6 vols (Edinburgh: William Blackwood, 1951-74) であり、慣行にしたがって *STS* (Scotland Text Society) と略号で表記する。

- (1) *STS*, 1: xvii-xx.
- (2) *STS*, 4: 236-8.
- (3) *STS*, 2: xvii-xx.
- (4) *STS*, 3: 225-9.
- (5) *STS*, 2: 109-12.
- (6) William Henry Irving, *John Gay: Favorite of the Wits* (1940; New York: Russell & Russell, 1962) 276-7.
- (7) *The Works of Allan Ramsay*, 2 vols (London: T. Cadell & W. Davis, 1800) 1: xl.
- (8) Myra Reynolds, *The Treatment of Nature in English Poetry between Pope and Wordsworth* (Chicago: The University Press of Chicago, 1909) 73.
- (9) *STS*, 1: 106-11.
- (10) *The Works of Joseph Addison*, ed. Richard Hurd, 6 vols (London: George Bell & Sons, 1901) 1: 28-37.
- (11) *STS*, 1: 204-7.
- (12) *STS*, 1: 138-48.
- (13) *STS* に「ジェニーとメギー」の初版は収められていない。*Spenser and the Tradition: English Poetry 1579-1830*, by David Hill Radcliffe (<http://spenserians.cath.vt.edu>) から採った。
- (14) *Letters of William Shenstone*, ed. Duncan Mallam (Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1939) 423-24.
- (15) James Beattie, "On Poetry and Music, as they affect the Mind," *Essays*

- (Edinburgh: William Creech, 1776) 119.
- (16) James Beattie, “On Laughter, and Ludicrous Composition,” *Essays*, 414.
- (17) Hugh Blair, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, ed. Harold F. Harding, 2 vols (Carbondale & Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1965) 2: 352-53.
- (18) John Pinkerton, ed. *Ancient Scottish Poems, Never Before in Print*, 2 vols (London: Charles Dilly et al, 1786) 1: cxxxiii.
- (19) “Remarks on the Genius and Writings of Allan Ramsay,” *The Poems of Allan Ramsay*, 2 vols (London: Cadell & Davis, 1800) 1: cl-cli.